
悪？ それは褒め言葉だ

unsouya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪？ それは褒め言葉だ

【Nコード】

N3353Y

【作者名】

unsouya

【あらすじ】

一人の男が欲望と野望を追い求めた末死に異なる世界で転生を果たす。

似たような物語は多くあり、珍しくもない。

しかし、男が欲したモノそれは何か……金、女それとも名声や権力か。 答えは否。そんなもの奴からすれば塵芥に等しい存在である。

奴の欲するモノ……それは『力』だ。

プロローグ（前書き）

注意

これは作者の妄想を具現化させたH×Hの二次小説です。

最強ものにならないよう注意いたしますが、どう転ぶか不安です。
そのところお気を付け下さい。

プロローグ

私は他の者とは明らかに違う存在だ。

確かに小説や映画に出てくるような特殊な能力も持っているし権力や金もある。一般市民から見れば普通とは違うであろう。

だが、私が言いたいのはそんな事ではない。

生まれた環境や人生が異なるのではない。この世界の住人とは『根本的』に違うのだ。

はっきり答えよう。

私は前世の記憶を持ち得ている。

持っているとしても平穏な生活のではない。むしろ争いの絶えない記憶だ。

前世の私はドイツで武器密輸企業を営み、自らの手で人も殺した。

正義と大義を掲げる自警団や軍が私に挑んだ時など虫唾が走りおつたわ。

素直に治安維持という名目で挑まないのかと、あの手の連中が考えることは分らん。

話を戻すが、私は全うな生活を歩まなかった。それと同時に私はこ

うも思った。

「更なる力が欲しい」

権力はまあ良い。根本的に欲しいものは純粹な力だ。

力を付けるために私は様々な格闘技や知識を学び積み重ねてきた。しかし、私は最強とはなり得なかった。

ある時部下の裏切りで私は重傷を負ってしまふ。

中々有能な奴だったが、奴は欲が強すぎ、最終的に私へと牙をむけたのだ。

奴の欲したのは権力と金、そして女などだ。確かに人の欲で多くの者が欲するものである。

だが、私からすれば二の次三の次なものだ。

私にとって権力や金は力を入れる手段の一つに過ぎない。

そうであろう。金などまた稼げばよい。

権力など力と比べれば容易に手に入る。

だからこそ私は更なる力を求めたのだ。

最も、部下がそうとは限らず、結果として私は奴の野望のために大怪我を負う。

まあ、奴はその夢を叶える事など不可能だったが。

それもそうであろう。奪われるのなら全てを吹き飛ばした方が良い。

だからこそ私は本社ごと自爆したのだ。誰かに奪われた時を考えて仕掛けておいた爆弾を使って、奴を含めた部下諸共……。

これが死ぬまでの話だ。

その後どうなったかというと神だか悪魔だか知れん奴から私にピツタリだという新しい体と能力を受け取り異世界で第二の人生を送る羽目になる。

成長するにつれ以前とは異なる力を実感でき、私は喜んだが満足はしなかった。

だからこそ他人から能力を吸収する事や念能力を強化したりなどを行った。更なる高みを目指すために。

何れは私を遊びの駒と評して第二の人生を与えた奴の能力も……。

まあ、良い。それは今後の課題だ。

今は目の前の戦いに集中するとしてよう。

「考えは終わりか？」

「ふん。待たずとも攻めれば良いだろう」

私の皮肉に目の前の男……シルバ・ゾルディックは獣の眼を向けたまま構える。

「できればそうしたかったが、思ったより隙がない」

「それは光栄だ」

暗殺者として有名なこの男が私の目の前にいるのは私のライバル会社に雇われ、私の始末に来たからだ。全く持って面倒事をと『少し』思うが、どちらかというとこの男と戦える事に喜びを感じていた。

それに……。

「貴様の能力を私のものにできれば好都合」

「ずいぶん舐められたものだ」

「だが、事実だ」

そうだと。同時に奴の親父に潰された右目の仮を返させてもらう。

「さあ、お喋りはここまでだ」

「そうだな」

私の言葉にシルバが同意をし、己の雰囲気ガラリと変える。

そうだ、そうだと。やはり戦いは強者を相手にしなければ意味がない。そして同時に力を取り込んでやろう。

奴の親父が今回いなかったのは残念だがそれは次の機会にでも。

そう考えながら私自身も身構える。

さあ、ゾルディックの者よ

「お手並み拝見といこうか？」

今、俺の目の前にいる奴はゾルディック家と何かと縁がある。

最初に出会った時は俺がまだ親父のサポートが多かった時で、奴が20代であった。

仕事内容は今と同じ奴の暗殺だ。

その戦いで奴は親父により右目を潰されたうえ重傷を負っていた。此方も幾らか傷を負ったが奴と比べたら軽いもので、勝率は此方が上である。

だが、奴は突如反撃し、俺と親父に相応の手傷を与えた後逃亡、しばらく行方をくらました。

ゾディアック家の総力を持って情報収集をした結果、3日で見つけられたがその時には俺たちの依頼主が殺されていた。正に屈辱でありゾルディックの名に一生傷を残す結果となる。

初めは奴を始末するべく行動を起こそうと考えたが、親父は反対した。その訳を俺が聞くと……。

「仕事の内だ。奴を仕留める時は奴から挑んでくるか、次の仕事の時ぐらいだ」

だから俺は一先ず諦めることにした。

再戦を待ちわびて。

最も、この再戦も直ぐに果たされた。

ある国で武器密輸を黙認する与党議員を暗殺してほしいと依頼があり、俺はそれを受けた。

何の問題もなく依頼を終わらせ、依頼主である野党議員の下へ戻ってみれば依頼主は椅子にもたれかかった状態で既に息絶えているのを俺が見つける。

そして依頼主の隣にはあの男が佇んでいた。

この光景を見た瞬間俺は理解し、思わず舌打ちをしてしまう。

この男は俺の依頼主を殺す仕事を請け負っていたのだ。

奴は俺に気が付くと振り向いてこう言い放つ。

「貴様も任務を終わらせたらしいな」

右目のない顔は以前よりも老けているように見え、同時により屈強

に感じた。無論それは見た目だけの問題ではなく、奴の實力もまた上がっているからこそといえる。

まあ、どうでも良い。問題は俺がいつの間にか構え、奴に飛びかかろうと考えていた事だ。

これは俺自身驚き、同時に実感した。

俺はこいつとのケリをつけたかったのだと。

それは奴も同じで奴は身構え、直ぐに戦いを始めた。

まあ、その時の戦いは決着がつかないまま終わったが。

ふと意識を現実に戻せば、奴は既に構えを取っている状態だった。

俺も人の事が言えんな。

それよりも、俺は奴との戦いに集中するでしょう。

心でそう自分に答えると俺は奴に向かって宣言をする。

「今までの汚名……今度こそ返上させてもらうぞ。ルガール・バー

ンシュタイン！」

そして俺と奴との戦いが再び始まる。

プロローグ（後書き）

あとがき

どうも今回此方に初めて投稿いたします『unsouya』です。
リアルが色々忙しいので投稿間隔が大きく空く恐れがありますが、
頑張って投稿したいと思います。

それと何か誤字脱字などがありましたらご指摘お願いいたします。

さて、次回の社ちよ。げふんげふん！……主人公はどうなるのか。
次回お楽しみに。

ROUND 1 (前書き)

遅くなると答えておきながら翌日に投稿。

ROUND 1

競売の都市ヨークシン。

ここは様々な商品が競売にかけられる場所で、貧富の差は関係なく元金さえあれば多くの者が訪れる。

そんなヨークシンの空港に一隻の飛行船が停泊していた。

飛行船は金持ちや国の高官が主に乗る豪華客船で、年に一度開催されるイベントのために多くの富豪たちが乗ってきたのである。

客船の乗客である者たちは現在、執事もしくは己の部下に荷物を運ばせ飛行船から。降りているところだった。

『皆様、この度はスカイクロス社のご利用誠にありがとうございます。長い船旅を満喫できましたでしょうか。どうかお忘れ物がありませんようご注意ください』

「今回はどんな商品が出されるのか楽しみですね」

「早速カタログを注文して読まなければ」

「私の狙い目ではペズンナイフの中期モデルを落としたいところ…」

…
「ほう、そうですか。それなら私は……」

金持ちや権力者たちが話に花を咲かせつつ空港の特別ロビーへと降り立つ。従業員の女性がお辞儀をし、お客へのお礼を口にするが客は誰も見向きもしない。彼らにとって周りの人間よりもこれから行われるオークションが大切なのだ。

そんな中、一人の女性従業員に乗客の一人が話しかけてきた。

「申し訳ないが、これはあなたなので？」

話しかけられた女性従業員は笑顔を崩さぬまま振り向くとそこには赤いスーツを着た長身の男性が立っていた。

見た感じ年齢は四十代で、横分けにした金髪と同色の髭を持っている。顔は整っているが、本来あるはずの右目が見受けられず、少し強面な印象を他者に与えるであろう。しかし、それでもどこか紳士的な雰囲気を感じられるため上流階級出身は一目で明らかだ。

服装は上下共に赤いスーツで着こなしており、スーツの下は白いワイシャツを着ているのが見受けられる。

そんな男性を見た瞬間、彼女は多少呆けてしまいが再びかけられた声に意識を戻す。

「も、申し訳ありませんお客様！」

頭を何度も下げ非礼をわびるが、男は別に構わないと答えると、女性の目の前にハンカチを差し出した。

「私はこれを落としたあなたに渡そうとしたただけだ」

男がそう答え何故かカールと男の名前が刺繍されたハンカチを渡す。すると女性従業員は再び慌ててお礼の言葉を口にする。しかし男はそれを手で制すと一礼をし、歩き去っていくのだった。

尚、受け取った当の本人は頬を染め、男が去った方向を同僚が注意するまで見つめていたという。

その男の正体が何かも知らず……。

現在私はヨークシンという都市にいる。

ここでは毎年大規模なオークションを行っており、資産家やマフィア、国の高官などが参加し、各々の欲するものを競り落とす。

中には非合法なものも多く取引されており、武器の収集家や人体収集家なども集まる。

何故私がここに来ているのかというと気になる商品が競りに出されているためだ。

その商品の名前は緋の目。かつて少数民族であるクルタ族が持ち得ていた特殊な目で、その美しさは世界七大美色の一つに数えられていた。

当のクルタ族は皆殺しにされたと聞いたがそれはどうでも良い。問題はこのクルタ族の眼はもう一つ特徴があることだ。

それは念能力を増幅させる作用があるというもので、私は更なる力を手に入れるためにこの目が欲しくなった。

「ルガール様。お待ちしておりました」

ふと声をかけられ、そちらに顔を向けると手配した部下たちが黒い高級車で出迎えていた。

どうやら考え事をしている最中に空港から出てしまったらしい。常に気配を感じとり対応できるようにしているが、この癖は直さねば

いかな。

オークション会場待合ホール。

現在ここでは様々な者たちがオークション開始を待っていた。特に今私がいる場所は堅気とはかけ離れた者たちが集う場所だ。

「久しぶりだな、ルガール」

「……ノストラードか」

後ろから声をかけられ振り向くとそこには以前取引の関係で知り合ったライト「ノストラード」がいた。

この男はノストラードファミリー組長で少し前までは地方の小さな組の組長でしかなかった奴だ。しかし此奴の娘ネオン「ノストラード」が保有している予知能力を使い十老頭傍系組の組にまでのし上がったやり手でもある。

私にとって権力はある意味必要だが、純粹な力と比べると明らかに

劣る存在である。

そのためか私は奴の地位よりも娘の能力に興味が向く。

「貴様の娘の評判はよく聞いている」

「ほう、そうか。だが、そんなお前も結構有名だぞ。なんせあのゾルディック家と何度も戦い撃退したこともある男だからな。それに武器の密輸も上手くいつて組織も大きくなったらしいな」

「……仕留められねば意味がないうえ組織の成長は造作もない」

奴の言うとおり私は何度もゾルディック家の奴らを撃退している。そのため裏組織での影響力は大きく拡大した。

時には十老頭直々に陰獣への参加を求められたが、私はそんな下らん犬になるつもりはない。

「おいおい、ライトじゃねえか？」

そんな他愛もない無駄話しているとサングラスをかけたデブが、取り巻きを連れて私たちの所に来た。

こいつは確か……。

「ゼンジ……」

「ほお、偉くなっても俺のことは忘れねえとは。コネを求める貧乏人癖が治ってねえな。やっぱ田舎暮らしが良いんじゃないか？」

ノストラードを馬鹿にしたような話し方をする男、ゼンジはどこがツボに嵌ったのか分らんが、取り巻きと共に大笑いをしている。

こいつは確かマフィアの組頭の一人で何かとノストラードに突っかかる三下のはず。

まあ所詮他人の功績に嫉妬する豚だ。

そんな事を考えていると豚がこちらに顔を向け、馬鹿にしたような顔になる。

「誰かと思えば武器商人のルガルか。なんだ、田舎野郎相手にせつせと胡麻擦り営業か？」

ふん、こちらにまで話を振るか。どうやら嫉妬にかけては飛び抜けているらしいな。

こんな奴は相手にしているだけ時間の無駄だ。殺すにも値しない。

「無駄な嫉妬は己の評価を下げるぞ。私は失礼するノストラード」
「ああ、そうだな。ルガールの言う通りだ。俺も娘の所に戻るとしよう」

そう答え、私とノストラードがその場を去ろうとするが。

「てめえら……今なんて言いやがった!？」

豚が怒号を放ちつつ拳を振り上げ向かってきた。どうやらこの豚は物わかりが良くないらしい。

そう考えながらも私は豚の拳を軽く避けると左手で奴の首を掴み持ち上げる。

周りからすれば一瞬の事で状況が把握できなかったのか、私の実力を以前見せたノストラード以外呆けた表情だ。

やはり豚の取り巻きも無能らしく、馬鹿面を周りに曝していた。全く持つて度し難い。

「ぐ、があが……」

む？ 此奴の存在を忘れていた。

如何やら強く締めすぎたらしく豚が顔を青くしながらもがいている。

このまま絞め殺そうとも考えたが、会場を豚の死体で汚すわけにもいくまい。

そう私が気につけ、豚を取り巻きの方へと投げ捨てるとさっさとこの場所を後にした。

豚の相手は、疲れて困る。

如何やらノストラードは娘がいる場所が私の席と同じ方向らしく途中まで付いてくるようだ。

「ああいう小物ほど嫉妬をするものだ」

「そうだな。自分で面を汚してるとも知らずに良くできるぜ」

その後も別れるまで他愛のない話をノストラードとするが、その間何度か娘の護衛を頼み込んできた。私はそんなつもりはないのだが。

尚、オークション時に奴の娘と緋の目を賭けた競り合戦をする羽目になり、手痛い出費となった。

むう……。

「丁重に運びたまえ」

「は！」

部下たちに緋の目が入った透明な特殊容器を渡すと私は外で控えていたリムジンへと乗車する。

奴の娘のせいで予想よりも出費が多かったが結局は手に入ったのだ、良いだろう。

それに金など更なる力が手に入るのなら幾ら出しても惜しくない。

「出せ」

私がそう命じるとリムジンはゆっくりと走り出し、宿泊ホテルへと向かう。

さて、目的の物は手に入ったので明日にはここを発つが……どうやら本日は別なイベントが待っているらしい。

「ふん、愚か者め」

後ろの席からバックミラーを見ると、この車を追ってくる数台の車が見受けられた。

やはりあの豚は始末するべきだったか？

とある武器商人を殺してほしい。そんな依頼だった。

もちろん同じような仕事は何回もしたことがあり、今回も同じだと俺は思っていた。万が一を考え、油断もしなかった。だが実際には違う。

俺たちが追っていたのは武器商人じゃなく化け物だ。

それを知った時には既に手遅れだったがな。

俺は裏の世界では多少名の知れた殺し屋だと思っており、腕は立つ方だと自負している。大半の奴は親密な仲間と組んで仕事をするが俺は違う。

仲間なんざいらねえし代わりに今まで以上名を残してろつと何時も

思っていた。そんな冷めた人間な俺だが、仕事を隠して付き合っている彼女に本当は違うと言われたな。

ぜってえありえねえ。

お守りと評してまあ仕方ねえかお守りと評して関係ない物を渡す奴だし。

まあ、それはどうでも良い。

話を戻すが、俺にとある組長さん直々に依頼が来た。大きな組織の組長らしく、直々ということはついに俺も出世街道を上り始めたのかと思つたよ。

依頼は簡単だとある武器商人がオークション会場から出て行った所を殺せというものだ。

初めは武器商人の情報を知るために依頼主へ情報提供を求めたが、中々取り合ってくれない。諦めることも考えたが成功報酬が多いうえ腕によっては更に上の組織に推薦してくれるとも言われて飛びついたね。

その後、どうやって殺すか作戦を立て、行動した筈が追跡は途中でばれていたらしく、向こう自らが人気のない場所に移動してくれた。

ある意味面倒がなくて良かったが、俺の不安は大きくなる。

向こうから誘うという事は、その武器商人はそれだけの自信と実力がある。またはそう自惚れているかのどちらかを意味しており、後

者だったら楽な仕事なのだが前者だった場合は非常に面倒な事になる。依頼主が情報を余り渡したがない事から前者の可能性は高いだろう。

仕方ない。ここは他の奴らと的確に連携して早めに潰すしかない。幸い、俺以外にも念が使える奴は五人いる。

見た限り三人は能力者としてそれほど強くはないだろうが、残り二人は俺と同等位だ。期待はできるだろう。

残りのゴロツキ連中は盾にでもするか。

そう考え、早速念能力者の同業者共と話を付ける。格下の内一人が誘いを断つたが、問題はないだろう。

さて、話をしている内に相手の車は既に人がない場所へと辿り着いていた。

人がいないなら遠慮はいらねえ。

「ぶっ放せ！」

誰かが言い放つと同時に屋根の扉を開け、バズーカ砲をぶっ放す。

するとあつという間に目標の車へ命中し、爆発炎上。以外にも呆気なかつたな。

「へっ。こりゃあ間違いないく月まで吹っ飛んだぜ！」

ゴロツキ連中の一人がそんな事を威勢よく吠える中、俺もつい気を緩めてしまう。相手がもし念能力者であつても流石に戦車を一発で破壊するバズーカを受ければ唯では済まない。車外に脱出した形跡も見られないから恐らく死んだな。

「どつやら思い過ごしか。やれやれ、やはり楽な仕事だったな」

俺が煙草に火を点けながら言葉を漏らすと周りの念能力者も同意する。

これで俺も晴れて上位暗殺者の仲間入りかな。そう考えるとついにやけてしまう。周りの奴らも考えている事は同じらしく、皆にやけ顔だ。

さて、依頼主に電話してそろそろ帰りますか。

そう思い懐から携帯電話を取り出すと。

「な、何だ。ありゃ……」

誰かの驚愕した声が聞こえた。

声のした方へ顔を向けると車から降りていたゴロツキの一人が燃え

ている車を見ながら驚いている。

一体何を見て驚いているのかと思い、彼が見ている方向。目標が乗っていた車がある方へと顔を向けると俺はその意味を理解し思考が止まってしまふ。

それは余りにも現実離れた風景で啞えていた煙草を落としてしまふほどだった。

多分他の奴らも同じだろう。今まで騒いでいた奴らの声が急に静かになっちまったのだから。

俺が今見ている光景は車の屋根を突き破り、男が飛びえてきたというものだ。

これだけなら仕留めそこなっただけだと思いき直ぐさま始末するが、そうではない。

出てきた男は赤いスーツに埃や煤が多少ついただけで、外傷が全く見当たらないのだ。

俺は夢でも見ているのか。戦車を一撃で撃破できるバズーカを受けて傷一つないなんて、俺が知っている限り念能力者でもありえねえ。

唯言える事が一つだけある。

どうやら俺たちは、とんでもねえ化け物を相手にしちまったという事だ。

「ふん、スーツが汚れてしまった。それに新しい運転手を見つけねば……」

スーツを軽く叩き、汚れを軽く落とすと男は俺たちに顔を向ける。

奴の右目のない顔を見た瞬間。俺は途轍もなく暗い底を覗き込んだような薄気味悪い感覚に囚われた。

やばい。やばい、やばい、やばいやばいやばいやばいやばい。

俺の頭の中で警笛が鳴り響き、忠告する声が聞こえる。

奴は化け物だ。逃げろ。

敵う筈がない。逃げろ。

殺されるぞ。逃げろ。

次々と俺の本能が逃げることを催促するが、それとは異なる本能。俗にいう直感が俺にそっと囁いた。

奴からは逃れられない。

「さて、片付けるか」

再び聞こえた男の声で現実を引き戻されると俺が長年培ってきた直感に身を任せ車から急いで降りる。

俺以外の念能力者も何かに気付いたのか、同じように車から降り、急いで離れた。

最後の一人が降りるとほぼ同時に男は片腕を振り上げるのを俺は見
る。

「烈風拳！」

振りあげると同時に男がそう叫ぶと、地面を這うような青い色をした気の波が現れ、俺たちがさっきまで乗っていた車へ向かっていく。突然の事で誰も回避せず、高速で向かう気の波はあつという間に車へと到達し、攻撃を受けた車は呆気なく爆発した。

それを合図にしてか、ゴロツキ共も行動を起こすがもう遅い。

「カイザーウェイブ！」

今度は両腕を後ろに引いて気を高めてから巨大な気弾を男は放つ。

放たれた気弾は、射線上のゴロツキを巻き込みつつゴロツキ共が乗った一台の車へと着弾し、大爆発を起こした。

く、やはり念能力者か！　だがあの能力はなんだ。奴は放出系か！？
瞬時に思考を纏め、奴の能力について考える。

威力や攻撃方法を見る限り、奴は恐らく放出系だろう。だが恐らく違う。奴は何か別なものを隠していると俺は考えた。

「ち、放出系かよ。だがその系統の相手は慣れてるんでな！」

格下の一人がそう言い放つと肩に担ぐ姿勢で、一つの武器を具現化させた。

具現化された武器は巨大な筒のようなもので、引き金とスコープが中ほどについている。また、後ろには六発式のリボルバー型弾倉があり、どこをどう見てもバズーカ砲にと受け取れる。

『オーラバズーカ実弾なき無反動砲！』

「こいつはさっきのバズーカとは桁が違うぜ！」

相手に宣言しつつ具現化されたバズーカからオーラで出来た砲弾を撃ち出す。そのでかさは、先ほど男が放ったカイザー何とかに迫るものだ。

当たれば俺でも大きなダメージは避けられないが、目標である男は笑うままであった。

「ハツハアア！」

男が笑い声を上げながら手の平を前にかざすと円形のバリアが現れる。形状から見て防御系の能力なのは分かるが、唯防ぐとは限らない。

そう思い見つめるとバリアに先ほど放たれたオーラ弾が接触したが、次の瞬間。オーラ弾が跳ね返された。

「はあ？」

間抜けな声を出したのは恐らく撃ち出した本人なのだろう。

それもそうだ。防がれるか回避されるかは誰もが考えるが、返されとは普通思わない。つまりこれを予測できなかったあいつらは痛いしつぺ返しを受けるのだ。

反射されたオーラ弾が本人に当たると次の瞬間巨大な熱量が俺たちに襲い掛かる。

念が破裂する独特の流れを感じ取り、この破壊が火薬によるものでないと能力者なら大半が分かる筈だ。

恐らく奴の近くにいた他の格下やゴロツキも全滅だろう。

そう考えると今残っているのは俺を含めた上位グループ三人と何と

か生き残ったゴロツキ数人だ。だがゴロツキは当てにできない。

だが、悪いことばかりではない。奴の手の内がある程度判明した。戦いのスタンスからして遠距離攻撃を中心にし、万が一近づいてきた場合はカウンターを返す戦法だろう。

そうと分かれば後は行動を起こすのみだ。俺は味方に合図するとそれぞれが左右前へと散る。

奴から見て俺は右から攻める事にし、後の二人は左と正面から向かう。

あの男は確かに強い。だが、俺も死にたくないんでな、全力で行く。まず左の仲間が変わった形のナイフを取り出し、牽制を始めた。ナイフにはオーラが込められており、攻撃力が増幅されている事が一目でわかる。最も、他にも何か仕掛けがあると思うが。

「ふん！」

腕を組んだまま体を少し斜めに反らす事で男はナイフを回避する。確かにあれだけ真っ直ぐに投げられれば、避けることは容易い。

それが唯のナイフなら。

「む………！」

奴が何かを感じ取ったのか、首を突如傾けると避けたはずのナイフが先ほどまで男の頭があった場所を通過する。

「ちつ。思ったより勘のいい奴だ」

『マジック・ナイフ
磁石な刃物』

オーラを通したナイフを合計六本まで操ることができる操作系の能力だ。

単純な能力だと思われるが、舐めていると痛い目に合う。

この能力の特徴は思い入れが強ければ強いほどナイフの攻撃力や効果が増す所だ。

例えば思い入れがない普通のナイフを使用した場合、進行方向を変えるなど簡単な操作は可能だがそれ以外は不可能で、ナイフの攻撃力も低下する。だが、奴にとって思い入れがあるナイフ……ペズンナイフなどを使用した場合は上下前後左右の移動だけでなく、空中停止や持ち主の手に戻すといった動きが可能だ。更にナイフ自身の攻撃力や防御力を大きく上昇させる。しかし、制約が存在し、思い入れがあるナイフの操作は三本までと決まっている。そのため普段は普通のナイフと合わせて使用しており、敵を騙しながら使っらい。

……幾ら連携して倒すといっても、ここまで教える必要はあるのか？

いや、奴は手ごわい。下手に秘密主義へ走ると連携が崩され俺らが殺される。だからこそ俺もある程度能力を教えたのだろ。

しかし、あんな短時間でこれだけの情報が得られるとは……あいつは情報屋でもやった方が良いと思うんだが。

『次は俺とお前で仕掛ける。』

そう考えているとご本人から態々ご連絡だ。

『信頼の情報供給』

正面から攻める仲間の能力で一定条件を満たし、尚且つこちらが承諾しないと発生しない能力だ。

制約は細かく教えられなかったが、この能力は最高十人までとなら情報供給が可能らしい。それと使用範囲は百メートル前後と中々便利な代物である。

更に便利なのはこれだけではない。この能力の特徴は知識の共用する事が可能なのだ。例えるなら俺が機械の組み立て方法や設計図を知り得た場合、知識として共用できる。そうすれば相手も組み立て方法や設計図を覚える。という寸法だ。しかし、知識は共有できても記憶は無理らしく、一応できなくもないが、それをやると自己を見失って激しく混乱すると答えられた。

それにしても何で態々こいつも戦うのかというと、奴の相手をするのに二人だけでは不可能と判断したためと自身が戦いたいと申し込んだからだ。

あいつによると元々この能力は依頼主からの無駄な説明を省くために作り出したらしい。

ある意味メモリの無駄遣いと勿体ない能力だな。

とにかく目の前の事を考えなければ。

そう考えつつ俺たち二人は突撃し近接戦闘へと持ち込む。

奴からカウンター攻撃が来るかもしれないが二人がかりで相手すれば防げるだろう。それにカウンターを繰り出した瞬間を狙えば一撃で倒せるかもしれない。

つまり、奴に反撃させれば勝算はある！

結論を出し、すぐさま二人がかりで攻撃を開始した。

相方は拳で攻撃し、牽制する。凝により念が集められた拳は一撃一撃が重く強力であるで大砲を連想させる。

だが速度が足りないらしく、攻撃を簡単に回避されている。このまま続ければいつか反撃を貰い、簡単にやられるだろう。だが攻撃側

には俺も加われればどうなるか。それも奴の死角である右からだ。答えは簡単。奴の反撃は中々出せなくなり、出したとしても此方が勝利するだけ。例え反撃しなくても俺たち三人が相手だ、何れ力尽きる筈だ。

そうまで考えて俺は気付く。

何だ、結局は勝てるじゃないか。

そう考え一先ず安心するが気を再び引き締めた。終わるまでが仕事だ。仕事を終わらすまで気は抜かない方が良いだろう。

それにだ。もし奴の能力が持久戦向きだったらこっちがやばい。

自分に言い聞かせるが先ほどよりも冷静でいられるのはやはり、光が明確に見えたからだろう。毎度思うが俺はマイペースな人間なのだろうか。

そう思っていると急に男が後ろへと下がり、何かを掴む姿勢へ変化した。

遂に来た！

恐らく痺れを切らして大技による反撃に出るのである。だが甘い。

今回の勝負。やはり俺たちの勝ちだな。

心の中でそう口にすると俺は自分の能力を発動させる。

『クリティカルヒット
特別打撃』

俺が発動させた能力は胴体部分を殴れば必ず重傷になるという強化系能力だ。

この能力の特徴はどんな奴が相手でも『重傷』という条件を叩きつけられるというもので、例えば攻撃を受けた相手が俺よりも遥かに強く頑丈でも胴体部分に当たったら重傷になる。

一見最強な能力に見えるが制約が厳しく使い勝手が難しい能力だ。

一つ目の制約は胴体以外に当たるとそれはただの『ヒット』と判断され、『クリティカル』にはならない。このヒットは、攻撃力が馬鹿低くて、なんと念未使用の拳と同じ威力だ。更にヒット回数が三回になると能力が消え一日念が使えなくなる。

これだけならまだ良いだろう。だが次の制約がもっと厳しく、一度でも攻撃を外すとそれは『ミス』と判断され、能力が一日使えなくなってしまう。

はっきり言ってここぞという時のための能力であり、無闇に使うものではない。

だが今となっては違う。今こそが使うべき瞬間なのだ！

拳を握りしめて俺は大きく振りかぶる。

本来なら見過ごせないほどの大きな隙だが相方が抑えている今なら問題ない。

どうやら男も攻撃するのか左腕を構えたまま相方に突っ込もうとするが関係ない。俺の……いや、俺たちの勝ちが決まった！

「この勝負。貰ったああああ！」

叫びながら俺は渾身の力を込めて拳を振り下ろす。

その先には何もなかった。

「え？」

俺の口から力ない声が自然と零れ落ち、同時にある思考が頭を支配する。

外れた？

次の瞬間。体から力が抜け、思わず膝をついてしまう。
この脱力感は何度か味わった事がある。これは能力が使用できなくなつた事による影響だ。

だが何故？

先ほどまで目の前にいたのに一体どこへ……あれ？

混乱で頭がパンクしそうになる中俺は気付く。

「あいつは……ヴァルバはどこ行つた？」

いつの間にか口になっていた名前。正面を担当していた仲間のヴァルバがいねえ。

あいつは一体何処に。

その時俺は微かに聞こえた。それは本当に小さな声だ。

そう……「逃げろ」と。

声の主がヴァルバだと気付くのに時間はかからなかった。理解した瞬間俺は声の聞こえた方向。つまりヴァルバが向いていた方とは逆へ顔を向ける。

するとそこには、奴によって壁へと押し付けられているヴァルバがいた。

壁は酷く陥没し、まるで小さなクレーターに見える。

そんな事はどうでも良い。問題はクレーター中心に叩きつけられ、血まみれのヴァルバがいることだ。

そういえばあいつは凝をしてたから守りが薄かったな。

現実逃避なのか、どうでも良い事を考えていると男に動きがあった。

詰まらなそうにヴァルバの体を持ち上げるとまるでゴミのように投げ捨て、血まみれの手を握り。

「ふん……弱いな」

そう吐き捨てた。

「てめえええええ!!」

もう一人の相方、ガズンが怒号を上げ、奴に突っ込んでいく。如何やらあいつもヴァルバを大切な仲間と思っていたのだろう。だが今はまずい!

「よせ、ガスン！」

大きな声でガスンを呼び止めるがそれでもあいつは止まらなかった。目の前まで近づいたガスンは雄叫びを上げつつナイフを振り下ろそうとして。

「馬鹿が……ジェノサイドカッター！」

男がカウンターとして飛び上がりながら脚を振りあげる攻撃を繰り出した。攻撃の性質から判断すると、その蹴りは鋭く打撃というよりは切り裂く事を中心にした技であろう。

何故わかるかって？

そりゃあ分かるよ。

ガスンがペズンナイフごと斜めに切られたんだから。

その場に赤い花が咲き、ガスンだったものが地面へと倒れるのを見て俺は何とも言えない不快な気持ちを心の奥から感じた。

この気持ちは何なのか理解したのは俺の目の前に男の手が迫った時だった。

悲しむなんて……俺って仲間思いなんだな。

彼女の名前が刺繍されたお守りのハンカチをポケットの中で握りしめながら俺はそう思った。

空港で女性はこれから飛行船へと乗るお客様方にお辞儀をしていた。

この時期は一番忙しいため従業員は毎日働き詰めだ。しかも彼女の場合対応するお客がお客なだけ、ストレスは募るばかりなのだろう。一般客の相手の従業員より疲れた顔をしていた。ふと彼女がため息をつくとき目の前にハンカチが差し出される。

「先ほど拾ったのだが君のかね？」

ハンカチにはカールと男性の名前が刺繍されており、彼女の物とは普通思えない。

しかしこのハンカチは彼女の物で間違いないらしく、素直に受け取りはお礼を言う。そして差し出した男性へと顔を向けると驚愕の顔を浮かべた。

「ん、どうしたのかね？」

「い、いえ何でもありません！」

緊張しながら話す女性に赤いスーツを着た男は首を傾げつつ用が済んだとばかりにゲートを潜り、飛行船へと搭乗するのであった。

「へえ。あんたって、年上好みなんだ」

「え！？ ちょっと行き成り何言いだすの！」

先ほどの男性が最後の乗客だったのか、その後乗り込む者は誰もおらず従業員である女性二人は私語をし始める。

「そんなんじゃないって！」

「はいはい。あんたには冷たい彼氏がいるもんね」

「つ、冷たくないよ！ 本当は優しい人だよ！」

同僚の言葉に顔を赤くしながら彼女は答えると次の言葉で顔を更に赤くし、文句を言つとそっぽを向いてしまふ。

そんな彼女の子供じみた対応に困ったのか、同僚はため息を吐き、仕方なく話題を逸らす。

「そういえばあなたのそのハンカチの名前。彼氏の名前よね？ 何でまた？」

突然の話題転換に彼女は少しキョトンとするが、恥ずかしがるようにしつつも口を開いた。

「えっと……この方がお守りになるかなって思つて」

ROUND 1 (後書き)

あとがき

意外と長くなってしまった。

とつか少し話が変わってしまったが全体的に見れば変化はないから大丈夫だろう……と思います。

今回の話はいかがでしたか？

誤字脱字や意見がございましたらお寄せください。

では最後に主人公さんからコメントを……。

ル<シヨウリナドタヤスイ

ROUND 2 (前書き)

今回の話は原作キャラクターに対して暴力的なシーンがございます。

その様な内容が苦手な方はそのまま閉じてお戻りください。

とある都市にあるオフィス街。そこは発展した国の経済都市ならばどこでも見ることが出来る高層ビルの森があり、様々な文明的建造物が建っている。この都市を地球出身者が見ればさながら地球におけるニューヨークを思い浮かばせるだろう。

しかし、似ているとはいえニューヨークとは全く異なる所も多々あり、所詮思い浮かべるレベルであった。

特にニューヨークとは全く異なる点が遠くからでもハッキリと分かる原因がこの都市にある。いや、遠くから見ると分かりますと答えた方が正しい。

その原因とは経済地区のほぼ中央に存在する超巨大高層ビル、バーンシュタイン特別中央ビルであろう。

高さ約777メートルのビルは、見る者を圧倒させるだけの威圧感と機能美を感じさせる超高層ビルだ。

東西南北にはそれぞれ日本風、西欧風、中東風、中国風な巨大な門があり、そこを潜り抜けた先は入り口が存在していた。入り口も大きく、普通よりも大きめな回転式自動ドアが4つと、かなりの規模

だ。現在、丁度出社時刻のためか多くの会社員が社内へと雪崩れ込んでいます。

高さも然る事ながら特殊金属で補強された建物は周りにはない頑丈さとデザインの神秘性そして同時に機能性を追求した美しさを併せ持つ。

正に都市の象徴ともいえる建物だ。

また、ビル周辺から内部の至る所には警備員や防犯カメラが配置され、24時間常に物々しい雰囲気を維持し続けている。

警備員の中には念能力者も僅かに見受けられ、守りは正に要塞といっても過言ではない。

そして何よりも驚く所は、このバインシュタイン特別中央ビルの在籍している会社は全て同じ系列に属している事と一人の男が出資したビルであるというものだ。

ビルの最上階に存在する社長室で、このビル所有者である男、ルガール・バインシュタインが黒い高級皮をあしらった社長椅子座りながら書類作業を行っていた。

彼が見ている書類は表企業での経営状況確認やプロジェクトの承認手続き、会議スケジュールに関する事が主で、裏に関する書類は一つも存在しない。

彼とて上に立つ人間としての役目は理解している。裏で大きなブラックマーケットを所有しているとはいえ表企業での仕事を疎かにする訳もない。もちろん裏企業でもだが。

しかし、やはり彼は有能で、書類の山をあっという間に片付けてしまふ。書類作業がこれほど早く終わるのだから、部下はある意味楽であろう。

最も、この男は戦いや力を求め長期間不在の時も多いが。

最後の書類に達筆な字でサインをすると、デスク脇に置いてあるベルを鳴らした。すると扉をノックする音が4回響き、続いて入室確認の音が発せられる。

「入れ……」

デスクに取り付けられたボタンを押し、扉の鍵を開けると入室の許可をする。扉で待機していた女性秘書は透き通る声で「失礼します」と断りを入れてから入室し、彼の横にまで移動すると書類を受け取りその場を後にした。

午前の仕事を全て終わらした事により、暇になった彼は椅子を反対に向けて外の風景を眺める。

最上階であるため、そこから見る眺めた風景は絶景であるが、下に目を向けると人がノミに見える事から、高所恐怖症者がこの景色を見れば腰を抜かすだろう。

「ふん……」

鼻を鳴らし、立ち上がるとスーツのポケットに手を入れ、窓際へと移動する。その姿は身長や容姿も相まってか中々様になっていた。

「幻影旅団か、クク……」

呟いた言葉は今回の仕事においての勢力名であり、彼の獲物だ。

「面白い……奴らの能力、私に取り込んでやろう」

ことの始まりは2週間前の夜、ルガールの系列企業の一つに奴ら……
…幻影旅団が盗みを働いた。

被害を受けた企業は特殊物品研究という会社で、過去に犯罪者が作

成した曰くつきの物品を研究、解明する場所だ。警備には念能力者も配属されている大規模施設であり、ハンター協会とも連携して運営している。

今回盗まれた品物はベンスナイフシリーズ10本を初めその他様々な歴史的物品であり、被害予想金額は盗難品だけでも約540億にも上り、施設や人員を含めると最早目も当てられない。

より詳細に被害を表すと研究品の約8割が盗まれ施設は5つある研究地区の内、4つが壊滅。警備を担当していたものは皆殺し、生き残ったのは避難していた従業員と襲撃とは別な研究施設にいた非戦闘員ぐらいだった。

無論報復を考え、討伐部隊を編成して向かわしたが諜報班を残し再び全滅、そこでようやく相手が幻影旅団だと判明したのだ。

対策班はこの報告に混乱し、自分たちでは対処不可能と理解する。しかし、諦める事は出来ない。ここで引き下がれば組織の面子が保てないからだ。最も、彼らは組織よりも自分たちの命が惜しいから諦められなかったと思うが。

そう、諦めずに反撃を続けた結果、奴らは逆に狩られた。

しかも旅団討伐本部を逆に襲撃されるといふのだから笑えない。

当然、こんな失敗をすれば社長であるルガールは激怒するのは明確な事で、彼ら全員粛清される運命となった。しかも情報を他の情報班だけでなく上層部に隠していた事も怒りに拍車をかけ、その班の監督役は家族諸共皆殺しである。

さて、肅清を済ませたのは良いが結局のところ問題は何一つ解決していない。一応別な部隊を編成し、任務を続行させるといった意見は多く出たが、幻影旅団を倒す事は不可能と判断されてしまう。

上層部が悩む中、会社のトップであるこの男……ルガル・バーンシュタインが討伐の名乗りを上げた。

この提案に会社の重役たちは反対意見だったが、結局は直ぐに通されてしまう。これはルガルによる強行や他に対応できる人間がない事も当てはまるが、重役たちの本心は彼に任務へ早く就いて欲しかった事も原因だ。

何処の世界に自分たちの上司を戦場へ行くようにお願いする部下がいるか。

普通はいない。

一部、念能力に自信のあるマフィア組長などはあるかも知れないが、一流カンパニーではまず考えられないであろう。

それはともかく、一企業の社長であり最高戦力でもある彼が打つて出るのだ。サポートに回る者たちは気が気ではない。また、二週間前ともなると幻影旅団の行方も分からず、情報部は自分たちの部下が起こした失態を報うためにも全力を挙げて情報収集を行った。

そして昨日ようやく幻影旅団の尻尾を掴むことに成功し、本日襲撃となる。

残念ながら幻影旅団全員がいる訳ではなかったため、一度での殲滅は不可能だが、団長と思わしき男を発見した事から奴を捕まえて情

報を聞き出せば解決するであろう。

因みに現在確認できる団員は8名で、ジャージを着た男と小柄な黒髪男、侍男、筋肉質な野獣、フランケンシュタイン、黒いコートを着たビジュアル系な男の男性6人。女性はピンクの髪をした和風女とスーツを着た女2人である。

彼らの現在潜伏している場所は隣国にある廃墟密集地で、そこにある旧ホテルで身を隠しているらしい。

その事を知ったルガルはとても笑顔だったという。

とある国にある都市の隣に廃墟地区というものが存在している。瓦礫やゴミが辺りに広がり、建物は倒壊しているか形が幾らか残っているものばかりで、まるで戦場跡を連想させる。

ここは昔、都市開発に失敗して廃棄された場所であり、盗賊や犯罪者の隠れ蓑になっている。しかし現在は『とある者たち』以外誰もいない。元々アジトにしていたチンピラたちも全員が消えてしまったのだ。

何故なら奴らに危害を加えようとした結果、皆殺しにされたのだから。

「おい、団長はどうした？」

「ん？ 確か上で本を読んでいた筈だぜ」

幻影旅団の一人、ウボオーギンは同僚であり長年一緒に戦ってきた相方、ノブナガに自分たちの家族でありリーダーである団長、クロ口の所在を聞く。
するとノブナガは、寝転んでいた体を起こし、自分たちがいるビルの2階であると上を指さしながら教える。どうやら先ほどまで寝ていたらしい。

「おう、サンキューな」

片手を上げながら礼を言うと、ウボオーギンは2階へと向かう。そんな相方を見送るとノブナガは再び横になるのだった。

「団長、いるか？」

2階にある個室にウボオーキンが入ると、そこには団長であるクロ

口が本を片手に読んでいた。

読んでいる本は少し前に盗んだ昔の物らしいがそんな事はどうでもよいとウボオーギンは考え改めて声をかける。

すると今度は反応し、本から視線を逸らし、ウボオーギンへと顔を向けた。

「どうしたんだ。ウボオー」

「団長、何で今回は何時もより慎重に逃げるんだ？」

クロロの返事にウボオーギンが間を置かず質問の内容を口にする。

彼が思うところでは何時もならもっと派手に暴れて逃げると考えた。

確かに施設の人間を皆殺しにしたうえ、追撃してきた奴らも殺した。しかし、襲撃時全員を召集させたのだから何時もなら奴らの更の上、本社へと攻めるぐらいはやると考えていたのだ。

「確かに今回は慎重だ。だが、それはまだ戦うべきではないと考えたからだ」

「んあ？ 戦うべきではない？」

クロロが口にした言葉だと今は戦ってはいけないと戦いを否定しているのだろう。

これはその存在が生きている事に利益をもたらすか、それとも戦いになればこちらが不利になるためかのどちらか二つを意味している。ウボオーギンは負ける事を余り考えられなく、団長の事だから前者だろうと考えを纏めた。

これには理由があり、襲った企業の守りが自分たちにとって弱く、呆気ないものだった事と追撃してきた敵の能力者は雑魚ばかりなためだ。

「もしかしたら今日中に来るかもしれない」
「んあ？」

ふと呟いたクロロの言葉が何を意味しているのかウボオーギンは理解できなかったが、答えは直ぐに知る事となる。

「団長」

突如、下で寝ていた筈のノブナガが入室し、クロロへ声をかけた。ウボオーギンは何かあったと直感し、クロロと共にノブナガへと顔を向けた。

「客が来たようだ。今フィックスが相手をしている」

廃墟に囲まれた空き地に何時もと同じ赤いスーツを着たルガールとジャージを着た男、幻影旅団の一人、フィンクスが向かい合う形で立っている。

「おい、てめえ。何もんだ」

フィンクスの質問にルガールが腕を組んだまま答える。

「何、簡単な事だ。私は貴様らを片付け、力を得る。唯それだけだ」

彼の舐めてるとしか言いようのない言葉にフィンクスは額に青筋を浮かばせながら拳を握った。

「そうかよ……じゃあ。俺がてめえを片付けりゃあ文句ねえな！」

そう怒号を上げつつルガールに突っ込むと、フィンクスは拳を振り

下ろす。

対するルガールは体を少し傾けることで攻撃を回避し、カウンターとしてパンチを見舞うもフィックスは一步後ろに下がり回避する。しかし、ルガールの追撃は終わらず、続けて右ストレートと放ち、再び避けられると蹴りも放つ。

無論フィックスも負けておらず、拳や蹴りを相手に食らわそうとするが中々当たらない。

そんな攻防が何度か繰り返すとフィックスは痺れを切らしたのか後ろへ大きく跳ぶと体制を建て直し、相手を見据えた。

「8回……てどこか」

呟いた言葉の後、フィックスは右腕を大きく回し始め、それと同時に右腕に籠るオーラの量がでかくなっていく。

『リッパー・サイクロン
廻天』

フィックスの能力で、腕を回せば回すほどパンチ力が増大する能力である。

しかし、フィックス曰く、加減が難しいらしい。

「6、7、8つと。行くぜ！」

回数を数え終わると同時にフィックスはルガールへと再び突っ込むが、今度は中々攻撃しない。8回分の威力を込めたパンチを携えてはいるが、避けられたら意味がないためだ。

そんな時、ルガールが後ろに下がり、両腕を後ろへ大きく逸らす。

この時フィックスは直感に従い上へと大きく跳ぶと先ほどまで立っていた場所にオーラを纏った双掌が通過する。

「ち、強化系か？」

難を逃れたフィックスがルガールの放った能力を見て強化系と当たりをつける。相手が強化系なら強さから見て互角と考え同時に笑みを浮かべた。

何故ならルガールは攻撃を回避され、大きな隙が出来ているためだ。

こんな好機をフィックスが見逃すはずもない。彼は右腕を振りかぶり、ルガールへと殴りかかる。この一撃は降下速度も合わせると恐らく必中の一撃であろう。

フィックスは勝利を確信するとほぼ同時に……死を覚悟した。

「つつ！」

フィックスは一瞬背中を電流が駆け巡る感じがし、己の直感を信じて堅を施す。すると次の瞬間、彼は途轍もない衝撃を体に受け吹き飛ばされてしまう。

吹き飛ばされたフィックスは何が何だか分からない。当然だ、彼はルガールにカウンターとして弧を描くような蹴りを浴びせられたのだから。

「ジェノサイド……カッター！」

ルガールが放った技、ジェノサイドカッターを受けたフィックスは地面に叩き付けられた後、自分の状態を確認すると思わず舌打ちをする。

攻撃は胴体に直撃したらしく肋骨が2、3本折れていた。しかも打撲や内出血も激しく重傷である事は一目瞭然だ。

しかしそれはある意味幸運である。もしあの時守りを固くしなければ彼は既にこの世にはいないであろう。

「ほう、防ぐか。ならば貴様は私のコレクションにするだけの要素がある」

「コレクション……だと？」

腕を組み、余裕を見せるルガールの言葉に強化系の能力で自分の傷を癒しながらフィックスは聞かずにはいられない。

この男は強い。そう判断したフィックスは時間を伸ばし相手の弱点を探ろうと考えたのだ。それに男の話も気になるという理由も後押しした。

「そうだ。私は戦い強いと認めた相手を倒すと銅像にして飾る。つまり貴様はそのコレクションに足り得る実力という事だ。誇りに思いたまえ」

ルガールの言葉を聞き、フィックスは再び怒りを露にすると立ち上がり、腕を回し始める。

先ほどの一撃もそうだが、話された内容が彼に燃えるような怒りを抱かせたのだ。こうなると最早手を付けられない。フィックスは両腕を回しながら己が敵へと全速で向かう。

「18、19、20！　じゃあテメエは潰れた蛙の標本にでもなりやがれ！」

20回という途方もない回数により強化された拳をルガルが見た瞬間、笑っていた表情を消すと攻撃を避けようと後ろへと下がるがそれを許すフィックスではない。

ルガルが回避しようと後ろに下がった瞬間、フィックスは己の右

拳を地面へと叩き付け、凄まじい衝撃と破片を周りに飛び散らせる。その結果、ルガールは大きな隙を作る事となり、フィンクスはその瞬間に近づき左拳をルガールの胴体へと叩き付けた。

「ぐあああああ!？」

殴られた衝撃でルガールは後ろの壁へと吹き飛ばされるが、壁に叩き付けられる前に体勢を建て直し、地面へと着地する。

対する一撃を与えたフィンクスも足を抑えて膝をついてしまう。

実際の所、一瞬の隙にルガールがお返しとばかりに烈風拳を放っていたのだ。

それにより両者とも大ダメージと思われるが。

「ぐ……なるほど。やはりその能力、私に取り込むべきか」

スーツの汚れを叩く事で落とすとルガールは再び構えた。言動から察するにフィンクスが持つ能力への欲求を更に強くしているらしい。

それにダメージを与えたものの、ルガールは確りとした姿勢で立っている事から中々丈夫なことが見て取れる。

「ち、化け物か？」

未だに余裕なルガールをみてフィinksは思わず毒づき、再び立ち上がるうとすると。

「おい、俺にかわれ」

後ろからやってきたウボオーギンに止められる。

ウボオーギンが合流している時、団長であるクロロを中心としてフエイタン、フランクリン、マチ、パクノダが集まり話し合っていた。尚、ノブナガはルガールたちから少し離れた場所で動向を見張っている。

「攻めてきた敵をこれから殲滅する」

ククロ口から発せられた言葉は何の事はない。何時も道理の行動だが。

「しかし、赤いスーツの男は後回しだ。まず、周辺でこちらを探っている奴の偵察員を始末する」

そう、彼は戦っている奴よりもサポートとして見張っている敵の排除を優先させたのだ。

これには他の団員たちも疑問に感じ思わず質問した。唯一マチだけが我関せずといった具合に黙っていたが。

周りの質問にククロ口は表情を変えず自分たちが相手にしている敵について語る。

「奴は強い。それこそシルバァゾルディックと同等レベルだ。実際に奴はシルバと何度も戦い互角または撃退をしている。我々としてはメリットもないし逃げる方が賢明だな」

この言葉に全員が押し黙るとククロ口は賛成と判断した。最も、フェイタンは渋々といった態度であったが。

確かにククロ口の言った事が本当ならば蜘蛛が負う被害は馬鹿に出来ない。最悪存続すら危ぶまれるだろう。

彼らにとって自分の命は二の次であり、最重要事項は蜘蛛を存続さ

せる事だ。

そして本当に危険な場合は、より貴重な能力を持った奴だけを逃し残りのメンバーで抑える事も視野に入れていた。

「それじゃ始める」

クロロが何時もと変わらない声色で発した言葉が合図となり、各々が行動を開始する。

蜘蛛を生き残らせるために。

現在、ルガールは旅団のメンバー2人を相手に戦闘をしており、状況は膠着状態に陥っていた。本来ならば団員が1人ずつ戦うのだが、

流石に今回はそう言っていられないらしい。

特に彼が相手にしているウボオーギンとフィンクスは旅団の中でも接近戦が最も強い強化系面子であり、想像以上の強さにルガールは攻めきれずにいる。

対する2人も相手であるルガールがシルバ並みの強さを誇るためと接近戦や遠距離共に対応する彼に苦戦していた。

フィンクスが右腕を回しながら突っ込み殴りかかるが、簡単に避けられる。これに対しルガールは反撃としてジェノサイドカッターを放とうとするがそこをウボオーギンの追撃が入り不発に終わってしまう。

そんな戦いを繰り返しているとウボオーギンが痺れを切らしてカールガールの後ろへと回り込み拳を振りあげると。

ビッグパンインパクト
『超破壊拳！』

オーラを込めた拳で思いつきり殴りかかった。

ウボオーギンの超破壊拳は拳にオーラを込めて繰り出すパンチという単調な攻撃だが、非常に威力が高く、リップーサイクロン20回よりも上であろう。

攻撃を受けたルガールは丁度フィンクスを相手にしていたため反応が遅れて回避が不可能と判断。右腕で防御するが余りの威力に右腕から骨が折れる音を響かせて吹き飛ばされる。

吹き飛んだ先にはコンクリートの壁があり、彼はそこに突っ込むと

壁を突き抜けてその先にある倒壊寸前のビルへと更に突っ込んだ。

この時、どこかの支柱を破壊してしまったのか、ビルは支える事が出来なくなり倒壊。ルガールは生き埋めになってしまう。

攻撃を当てる事に成功したウボオーギンは振り下ろした状態のままその様子を眺め思わずガッツポーズを決めた。

「そっしゃ！ 大当たりだぜ」

歓声を上げるウボオーギンとは対照的にフィンクスは油断なくルガールの生き埋めとなった瓦礫を見続けている。恐らく今まで自分を苦しめてきた相手がこの程度で死ぬはずがないと考えたからである。

そんなフィンクスの反応にウボオーギンは頭を掻きながら声をかける。

「警戒し過ぎじゃねえか？ 確かに強えが、俺の全力超破壊拳を確実に食らったんだ。少なからずダメージはある筈だぜ」

強敵と戦えて機嫌が良いためか、上機嫌に答えるウボオーギンだが、フィンクスはそんな仲間に構わず警戒を続けた。

すると瓦礫の山が崩れ始め中からスーツをボロボロにしたルガールが姿を現す。

彼は防御した右腕が大きく曲がり、複雑骨折しているのが見て取れる。また、体の至る所に傷や打撲が見え、重傷なのは明らかだ。

「ち、思ったより頑丈だな。俺の超破壊拳を受けて生きてるとは殺し甲斐があるぜ」

ルガールのしぶとさにウボオーギンが舌打ちをするが内心本気を出せ会える敵と戦えて嬉しいのが、声色が明るい。

しかし、ルガルも重傷を負っているながらその表情を絶望に染めていなかった。いや、彼の態度からは未だ余裕すら窺える。

「成程、一筋縄ではいかんか……ならば良からう。私の力、存分に味わうが良い」

重傷にも関わらず静かに、しかしハッキリと聞こえる声で話したルガールの声色はどこか喜びと微笑を含んでいた。

突如ルガルが左手で右腕を掴むと鈍い音を響かせながら向きを元に戻す。普通の感性を持った人間が見れば目を背けたくなるような行動だが、ここにいる人間は誰もそれに当て嵌まらない。

無論向きを戻しただけで治る筈もなく腕は未だに不格好だがそのまま両腕を顔の前で交差させて力んだ状態。つまりオーラを貯め始めると彼に変化が起きる。

今まで彼が持っていたオーラが色も流れも変わり、禍々しい殺意には溢れたものへと変化したのだ。

だが、変化はそれだけでは終わらない。

ルガールの右腕は鈍い音を立て続けながら治っていき、ほんの数秒で完治した。修復時に血が流れたためか右手が己の血で汚れ、黒革の手袋は弾け飛び失ってしまう。

腕の他にも髪が銀髪へ、肌は浅黒く変色した。また、ポロポロになったスーツも赤から血のように赤いワインレッドへと変わる。

しかし、一番の変化は彼の目であろう。何故なら失った右目が復活し、両目とも赤く光放っているのだから。

何故このような変化が起きたのか。それはルガールの右目に移植された緋の目が原因だ。

以前オークションで落札された緋の目は彼の研究所へと持ち帰り失っていた右目へと移植された。当初は何の変化もなかったが、不思議なことに翌日には右目から緋の目が消えていたのだ。調べた結果、唯見えなく擬態されており、力を引き出すと普通に現れるらしい。

それだけならばまだ小さな変化だが己のオーラを右目に込めて殺意を高めると説明したような変化が起こり彼は更なる力を引き出せるようになった。

正に正真正銘の怪物へとルガールは変化したと言えよう。

これには彼の相手をしている2人も唾然とし、ノブナガに至っては緊急を知らせる信号を直ぐにクロロたちへと発信し、自分もウボォーギンたちの加勢にまわっている。

つまりそれ程までに危険な存在と化したのだ。

そんな旅団を見てルガールは大きく笑った。今の彼にとって人数が幾らいようと彼らに勝ち目はないはないと判断したためである。

対する旅団組は皆汗を流し、仲間が合流または逃げるまでの時間を稼ぐ方法を考え始めた。

しかし状況は常に動くもので、ルガールは血塗れた右腕を前に出し握り潰す動作をする。

「さあ、お手並み拝見といこうか！！！」

モザイクかかった半透明な声でそう宣言した。

世の中には化け物と呼ばれる存在がいる。

裏の世界で数々な犯罪行為を起こした幻影旅団は正にそうであろう。

しかし世の中には化け物すらも狩る化け物が存在し、大きな殺戮を引き起こす。

それが当てはまる存在はごく僅かで、例を挙げるとゼノゾルディックやシルバゾルディックのゾルディック一族が当てはまる。また、ハンター協会会長のネテロも実力で言えばそちらに突っ込んだ存在だ。

そしてもう一人、この領域に達した人物がいた。

他の誰でもない。幻影旅団が今相手にしている化け物、ルガール・バーンシュタインである。

人々はこの領域へと踏み込んだ者たちをこう呼ぶ。

怪物と。

ROUND 2 (後書き)

あとがき

皆様お待たせしました。

この度は一週間の間隔を空けての投稿となりましたが、できればこのペースを保ちたいと考えております。

また、本作品を読んで頂き誠にありがとうございます。次回も頑張って仕上げていきますので、よろしくお願いいたします。

私は未だ未熟なため文章表現や誤字脱字がございましたらドンドンご指摘してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3353y/>

悪？ それは褒め言葉だ

2011年11月17日09時30分発行